

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第132号

イザヤ 65:1

平成18年9月29日

~~~~~

狭い門からはいりなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこからは行って行く者が多いのです。いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやって来るが、うちは貪欲な狼です。あなたがたは実によって彼らを見分けることができます。ぶどうは、いばらからは取れないし、いちじくは、あざみから取れるわけがないでしょう。同様に、良い木はみな良い実を結ぶが、悪い木は悪い実を結びます。．．わたしに向かって、『主よ、主よ。』という者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。

その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。』しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』だから、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行なう者はみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができます。雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけたが、それでも倒れませんでした。岩の上に建てられていたからです。また、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行なわない者はみな、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができます。雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまいました。しかもそれはひどい倒れ方でした。」

マタイ7:13-27

キリストに従う道が、真理を憎むこの世に流行する物事が盲目的に受け入れられてしまうようには容易く受け入れられる道ではないこと、また、誘惑の多いこの世にあっては決して楽な道ではないことを身を持って体験しておられるキリスト者はどれくらいいるでしょう。昨今日本にも、聖霊の働きを仰ぎ、聖霊の賜物を用いて「信仰によって行動する」福音宣教の流れが特に米国からどんどん持ち込まれていますが、初代教会以来無視されてきた聖霊の働きに正しく目が向けられるようになったという点では歓迎すべきことですが、イエスの教えから反れている点があることにも着目しなければなりません。日本に持ち込まれるミニストリー、伝道手段のほとんどすべてはすでに、自国、諸外国で大きく受け入れられたもの、普及率から言えば成功を収めたもので、日本でも同じように広がることを期待されているわけです。しかし、「狭い門」から入る道を勧められたイエスのお言葉に照らすなら、多くの人たちが飛びつくような教え、礼拝形式、賛美、宣教手段はすべて、耳に聞こえがよく抵抗なく受け入れられるからといってそのまま取り入れてしまうのではなく、御言葉に照らしてよく吟味する必要があります。

イエスは、世の終わり、特に終末の末期には選民をも惑わされるような惑わしが起こることを警告されましたが、キリストの純粋な福音の中にすでに多くの異端的要素が付け加えられている今日、すでにこのことは起きているのです。惑わしは世俗のこの世、外部からというより、神の言葉に通じている内部から来るものであるだけに、混ぜ込まれた「パン種」は残念ながらほとんど見分けがつかない状態です。しかし、冒頭に引用したキリストの言葉「いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれ。．．わたしに向かって、『主よ、主よ。』という者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいる。．．わたしのこれらのことばを聞いてそれを行なう者はみな。．．」(下線付加)に、鍵があります。ここで、父なる神の御旨は「聖書」に記されている言葉、神の掟で、父の御旨に最期まで従順であられたキリストの「ことば」も父の言葉、すなわち、「聖書」です。キリスト教の有名な霊的指導者が神の言葉には書かれた言葉“ロゴス”と啓示される言葉“リーマ”とがあり、信仰によってリーマを実践していくことを説いたことから、ひところカリスマ派では信仰によって第一歩を踏み出すことの大切さが奨励され、ブームになったことがありました。しかし、人がリーマとして受け止める言葉、思いには神以外の源から来るものが多いということを忘れてはいけません。そのほとんどが自分自身の肉の思いと偽りの霊の惑わしであったことは、英国のカリスマ教会が十数年前に失敗を通して学んだことでした。神が命じられた物ではなく、受け入れられるだろうと信じて自分が最上だと思っさげ物をして拒まれたことから、さらに大きな罪、殺人へと進展していく人間の罪の性質の恐ろしさを、カインのアベル殺しの出来事を通して聖書は人類史の初期にすでに語っていますが、神の基準以外の物差しでは善悪を判断できない私たちは、すでに「聖書」に記されていることとその範疇にある啓示に徹して、信仰を実践していくべきなのです。

この世で大きく進展するミニストリー、人々から受け入れられること、自分の良いと思うこと、神を喜ばせることができるだろうと思うことをすることを聖書は奨励しているのではなく、ただ、父のみこころを行なうこと、すなわち、神の掟を守ることを奨励しています。箴言に「人は自分の行ないがごとく純粋だと思ふ。しかし主は人のたましいの値うちをはかられる」とあるように、聖霊の賜物をいた

だき、キリストの名でどんなに多くの預言、除霊、癒し、奇蹟を行なっても、自分の魂—動機、思い、意志、感情—の状態が神との正しい関係になれば、すなわち、キリストによって変えられた、新生したと自負しながら、なおかつ自我優先に生きているなら、外見は羊のなりをしていても内は食欲な狼がどこかで本性を現わすと同じように、産み出す「御霊の実」の有無によって必ず偽りが暴かれるときが来ます。神は裁きるときまでは人間が自由意志を行使して好きな道を歩むことを許してくださっていますが、すなわち、裁きがすぐに下されるわけではないので神の御旨を行なっていると錯角してしまいがちですが、選んだ道に対して責任を取るのも自分であることを銘記すれば、突然大洪水（裁き）が訪れ、「岩」なる神の言葉、キリストを土台として立っていなかったため破壊されるような事態に至ることがないように、日々罪を悔い改め、清算しておくことが「主の日」に備えるということであり、キリスト者の歩むべき道なのです。

「異邦人の中にもないほどの不品行で、父の妻を妻にしている者がいる．．．そのような行ないをしていてあなたがたの中から取り除こうとして悲しむこともなかった」（コリント第一5：1-2）とパウロが非難したのは、俗界ではなく、聖霊に満たされることには熱心で公共の益のために与えられた御霊の賜物を誇り、ミニストリーに用いておごり高ぶっていた反面で、不道徳に陥り、堂々と神の掟を破っていたコリントの教会に対してでした。このような与えられた自由を肉の働く機会にして道を踏み誤った聖霊に満たされたクリスチャンの問題は、健全な教えには耳を貸そうとせず、自分に都合の良いことしか聞かなかった自分中心な心の状態が結んだ実でした。「わたしは、平和をもたらすために来たのではなく、剣をもたらすために来たのです．．．自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。」（マタイ10：34-38）、「わたしはまことのぶどうの木．．．枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません．．．もし、あなたがたが、わたしの戒めを守るなら、あなたがたはわたしの愛にとどまるのです．．．わたしがあなたがたを愛したように．．．あなたがたが互いに愛し合うこと、これが、わたしのあなたがたに与える戒めです．．．しもべはその主人にまさるものではない、とわたしがあなたがたに言ったことばを覚えておきなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害します。」（ヨハネ15：1-20）とイエスは、キリストに従い、実を結ぶ道が決して楽な道ではないことを再三再四教えられましたが、昨今のキリスト教には、人道主義、平和主義を目標にするあまり、この世に受け入れられるためにキリストの厳しい教えを骨抜きにし、弟子作りではなく会員を増やすための手段を選ばない宣教傾向が見られるのは遺憾なことです。

キリストの福音にいつの間にか入り込み大きな影響を及ぼすようになっている新奇なパン種として、「人はどのように変わり、どのように生きるか」を扱う心理学の一分野、心理学に基づくクリスチャンカウンセリング、精神療法をあげた人は少なからずいます。今世紀にかけてますます、初代教会が福音宣教の手段として決して用いなかった心理学的手段が大手を振ってキリスト教会で用いられるようになってきていますが、神の存在を否定した人間が作り上げた心理学論は短期的には効果を上げるように見えても、長期的には改善の証拠がないことが昨今明らかになってきている科学的根拠のない、<sup>えせ</sup>非科学的理論で、むしろ福音の真理を歪め、魂をむしろむしばむ恐ろしいパン種であることが裏付けられてきていると言います。専門的にこの問題に取り組んだクリスチャン指導者らは、次の四つの仮定が間違いであることを警告しています。1) 精神療法（心理学論と手段を用いた心理学的カウンセリング）は宗教ではなく、科学である。この仮定から、精神療法は人間の問題を解決するのに信頼に値する客観的手法であると受け止められるようになった。2) 心理学と聖書を活用すれば、最高のカウンセリングが生み出される。心理学を学んだ者の方が有効な人助けをすることができるという信心をクリスチャンの内に助長することになった。3) 精神的、情緒的、行動的問題を抱えている者たちは心の病気、心身症である。したがって、心の病には精神療法が必要で、医者が体を対象とするなら、精神と情緒は心理学的訓練を受けた者が取り扱う領域である。4) 専門家による精神療法は大きな効果を上げている。自力や家族、友人など、素人療法では改善の余地がない。

カウンセリングに携わっている者の立場から、誤解のないように、一口に聖書的、クリスチャンカウンセリングといっても心理学的知識に重点を置き、悩み苦しむ者を「幸せにすることを目標」に精神療法に則って導く世俗的なものから、最良のカウンセラーとしてのキリストのアプローチにならない、「神の御旨を行なうことを目標」に悩み苦しむ人を解放へと導く、聖書に則ったカウンセリングまで多種多様であることを断っておかなければなりません。カウンセリングには患者を解放する方法として、1. 神からの直接的、2. 精神療法による心理学的、3. 除霊による、の三通りがありますが、私個人としては1. の立場を取っています。心理学的方法を知識として学んでおくことは役には立ちますが、手引きに依存して診断し、いたずらに療法期間を延ばす人間的手段ではなく、聖霊の導き、聖書に依存して、神が示してくださる洞察に従って、「罪」のゆえに体の病、心の病が起こることを悟らせ、神への反逆の姿勢を悔い改める方向へと導くカウンセリングこそ人を根本的な問題から解放する唯一の手段であることは言うまでもありません。神と自分との関係を吟味することで自分自身にこのカウンセリングができれば、最も聖書的といえますが、神は人を通して働かれますので、キリストとの近い関係にあるすべてのキリスト者はだれでもカウンセラーとして人助けができるということです。そもそも罪のゆえの神からの隔離によって人間に心身の問題が生じるようになったことを認識すれば、魂（心）の問題も体の問題もキリストによる救いを信じ、全身全霊で従うことによって解消するはずなのです。キリストが言われた「いのちに至る狭い門」とは、自分の野心、誇り、主張を捨て、神中心、利他主義に徹する生き方で、神の憐れみ、聖霊の助けにただすがる道なのです。